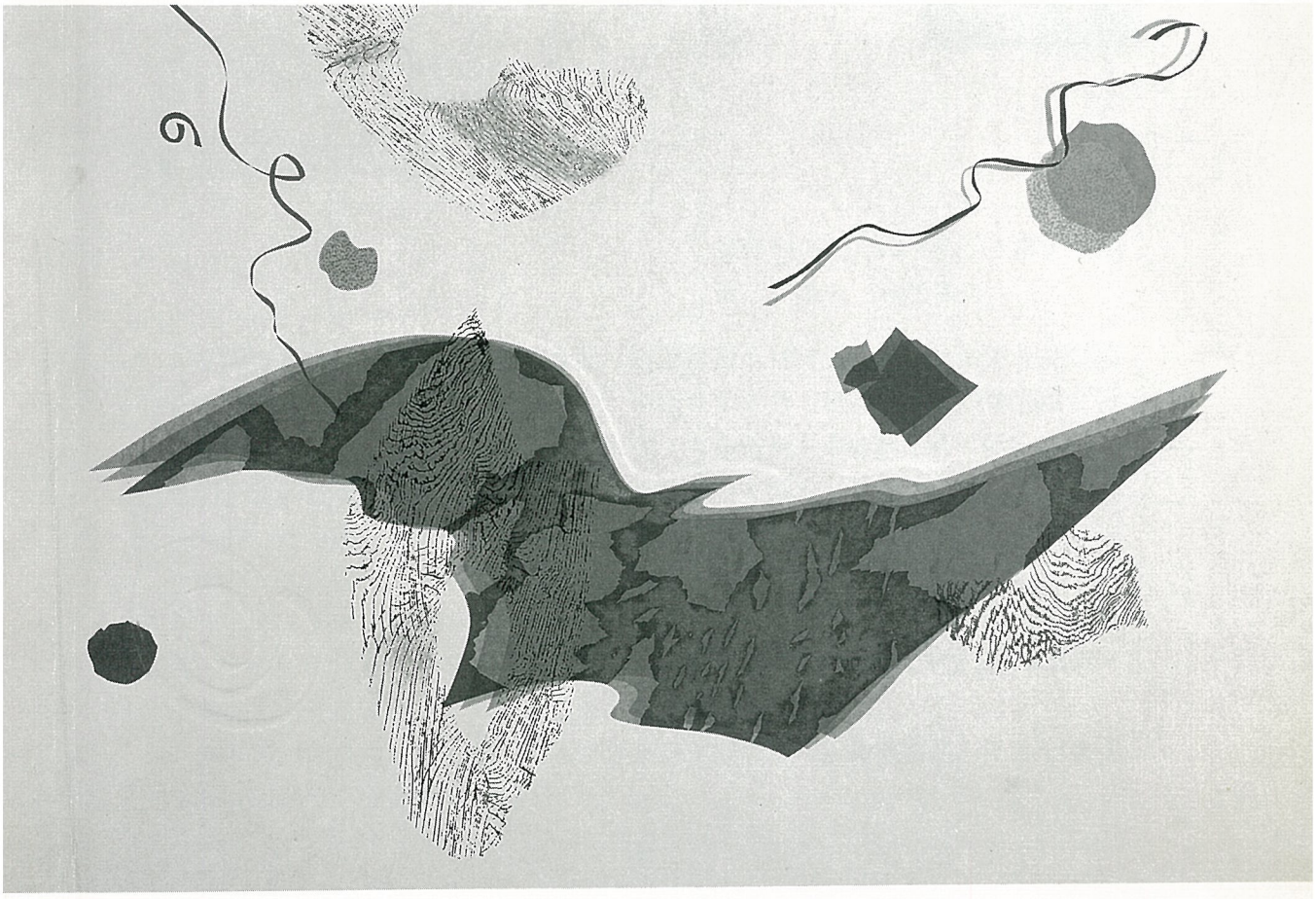
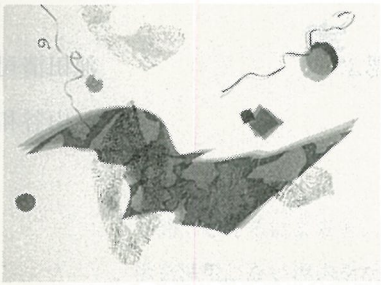


富山医科薬科大学

医学部同窓会報

1994．第3号



富山医科薬科大学

医学部同窓会会報

1994・第3号

5．実力の違い　高田良久

9．**富山医科薬科大学卒業生の富山県内公的病院就業状況**　浜田富美男　高田良久

24．卒前・卒後の臨床教育と医学生の行動パターンに関する研究　高田良久

11．臨床医学教育に関する研究について

34．英国医学協議会視察について

46．医学図書の充実について　教務部図書課

附属病院短歌俳句の会作品集第一号（綴じこみ）

32．**医療の未来・医薬大の未来**　加藤弘巳

16．富山医科薬科大学での14年を振り返って　水越鉄理

17．退官に寄せて　窪田靖夫

18．富山医科薬科大学に奉職して国際交流活動に想うこと　山本恵一

20．退官にあたって　永田正典

自著紹介

22．「ウイルス肝炎」出版に寄せて　渡邊明治

23．「研修医のための呼吸器疾患診療マニュアル」を出版して　水島　豊

追悼

38. 山本文昭君を偲ぶ　池田清司他
40. 遊びの達人　山谷和正

あの人この人

42. 短　信　—第12回総会出欠連絡ハガキより—
44. 人事消息

学園だより

48. 自治会存亡の危機を憂う　佐藤　聡
50. 体育会この一年　八木　満
52. 平成５年度の文化部会　小野輝朗

会員連絡

1. 会費納入のお願い
7. 会名募集
21. 開学十周年記念誌購読について
31. 医学会入会のお勧め
47. 原稿募集
54. 平成５年度（第12回）総会議事録　沢　丞
56. これからの同窓会の運営にあたって　山下弘子
57. 会計報告
58. 職掌分担
60. 名簿資料収集責任者一覧
68. 会則
72. 編集後記

協賛社一覧（裏表紙）

—表紙—

「翔」

木版型押し　91×62cm

作：金子千恵子

立軌会会員

日本版画協会会員

協力：大沢野クリニック

半田豊和（昭和57年卒業）

高野　隆（昭和58年卒業）

実力の違い

会長　高田良久（昭和57年卒）

聞くところによると、ある大病院の院長先生は、その病院に医薬大卒業生を採用しない理由をたずねられて、こうおっしゃったそうだ。

「実力が違いますからね。」

確かに明らかに違うものもある。入学試験の偏差値である。

医学教育の成果を入学試験の偏差値をもって判定するのであれば、この病院長のおっしゃることは全く正しい。しかし、いかなるスタッフがいかなるシステムで、どんな実力をもった医師を育てたかを医学教育の成果と考える者にとっては失笑を禁じ得ない発想である。いささか単純すぎる反論だが、例えば、医師国家試験の合格率に「実力の差」というほどの差があるだろうか。おそらくない。

いったい「実力の差」とは何か。それはどんな場面で現れ、どんな違いとなっていくのだろうか。

次の表は、1990年に開かれたプロによるコンサートの人口10万人あたりの回数である。東京の圧倒的1位はここでも我国の一極集中構造を証明する結果となったが、富山7位もまた、意外な数字ではないだろうか。

表　人口10万人あたりコンサート回数

順　位	都道府県	回　数
1　位	東　京	26.75
2　位	京　都	10.77
3　位	大　阪	7.72
4　位	宮　城	6.47
5　位	長　野	6.31
6　位	北海道	5.28
7　位	**富　山**	**5.25**
8　位	兵　庫	4.90
9　位	石　川	4.84
10　位	愛　知	4.68

日経産業消費研究所地域経済研究部による、1992.9.21 日本経済新聞より

興味深いのは、このランキングを紹介すると、いわゆる好楽家の間に2通りの反応がみられたことだ。

ひとつは

「7位とは予想以上だが、最近確かにコンサートの数が増えていると思う。

行きたいと思うもの全てに足を運びきれない。」
というものである。こう思う人は日頃情報誌や演奏会場のチラシなどでこまめにコンサート情報を仕入れ、聴きたいと思ったら、有名無名を問わず熱心に足を運ぶ好楽家に違いない。こういう人が多いと音楽文化のレベルは上がると思う。

今ひとつは
「プロと言ってもいろんなプロがいますからね、お金をとるコンサートを集計したっていうだけの話ではないですか。」
というものである。一面の真理ではある（さすが事情通は見方が違う）。しかしその根底には一種のブランド信仰があり、こうした人々ばかりだと独自の文化は育たない。

確かに、「骨董屋の修行はまず本物ばかり見せて目を肥やす」といわれるが、骨董と違って音楽芸術は一過性であり、水物でもある。スタープレーヤーならいつでも名演とは限らず、有名でなくとも素晴らしい演奏を聞かせる人もいる。高価なコンサートが「こんなものか」で、招待券をもらったから行ってみたらとてもよかった、ということもある。だから、音楽文化の創造育成に重要なのは、過去の評価や他人の評価に追随するのではなく、自ら作品や演奏の価値を評価判断する力を磨き続ける人々がどれほどいるか、ということなのだ。

大学の評価も同様である。仄聞するところでは、高校の進路指導においても、成績のよいものは偏差値の高い大学を受験させ、やや劣る者に医薬大を受験させるという。しかし偏差値とは、過去の合格者から予備校や新聞・雑誌社が算出した入試合格の難易度を示す指標のひとつでしかない。しかも他者の評価である。偽物とわかっていてもシャネルのマークのついたバッグがほしい人もいるそうだが、偏差値信仰ともども過度のブランド信仰は滑稽であり、哀れでさえある。もう、他者の評価に追随するのではなく、自らの価値基準を磨く習慣を身につけるべきだ。

大学の大綱化、自己評価の潮流は、昨今の世界情勢の急変化と相まって大学のあり方を変えていくに違いない。おそらく、芸術文化のみならず、教育・研究の場においても、その目標は知識の習得、極言すれば「事情通」になることではなく、創造力・真の鑑識眼の涵養となってくるはずだ。もちろんそれは決して知識の価値を軽視するものではない。むしろ、創造力や鑑識眼といったマニュアルを越えた力の涵養に不可欠な条件のひとつとして自明のこととされただけである。

広く世界に認められる本学の実力とは、我々同窓会員の創意と努力の積み上げそのものにほかならない。少壮の教授陣、意欲ある同窓生に恵まれた本学の未来は明るいと思うのだが、いかがだろうか。

たかだ・よしひさ　富山医科薬科大学第１内科